
観幸書店の実幸さん

琉祇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観幸書店の実幸さん

【著者名】

N7982N

【作者名】

琉祇

【あらすじ】

住宅街に一軒だけぽつりと存在する何やら不気味な雰囲気の本屋・観幸書店の主、実幸さんと、そこを訪れるお客様とのお話。

仲澤鳴海の場合 第一冊

俺の名前は仲澤鳴海。なかざわじやなくてなかさわだ。そこに気を付けてくれ。

えー、仲澤鳴海15歳、高校1年の夏。ただいま、絶賛失恋中。

「…ごめん、なんかやつぱり無理。私、漫画とか読まない人だからなんか気持ち悪いwww」

数時間前、俺が彼女…いや、元彼女に言われた言葉。…思い出しても腹が立つ。漫画好きで何が悪い！！人の趣味嗜好なんてそれぞれだろうが一つっ！！

2か月前。俺はクラス一の美処女…じゃねえ美少女と名高い朽木由利音に告白した。まあ正直なところダメもとだつたけれど。でもそれがなんと朽木はオーケーしてくれて、そこから俺と朽木のお付き合いが始まった。だがしかし。俺は自慢じやないが彼女がいたことなんてこの15年間ない。年齢＝彼女いなし歴つてやつだ。そんな俺は可愛い彼女を前に何を話していいか分からず、ぱにくつて俺の好きな漫画の話をしまくった。ら、今日振られた。…冷静に考えたら、振られて当然のような気がしてきた。…たまには普通の本も読んでみるか…。

そう思い本屋へと歩き出した。だが俺がよく行く本屋は漫画メインであまり本を置いていないことを思い出し、立ち止まる。…このあたりに本屋つてほかにあつたか…？…まあ一軒くらいあるだろう。そんな甘い考えで適当にふらふらと歩きだした。

結論から言つと、本屋はなかなか見つからなかつた。あつたと思つ

たら古本屋だつたり（俺は漫画や本は新品で買うようにしている）、すでに潰れていたりと、不思議になるほどまともな本屋がなかつた。これはちよつと遠出でもしないとダメか…？そう思いながらダメもとでどう見ても住宅街な感じの狭い道へと入る。このあたりで見てないところなんて、すでにそこくらいしかなかつたから。

その道は狭いこともあつて普通の通りと比べると少し暗い。その暗さに驚き、腕時計を確かめると、もう7時半だつた。親は放任主義なのであまり心配はないがこれ以上遅くなるのは流石にまずいかもしない。この道で最後にしよう。そう思いながらくつ歩く。すると、少ししたところに「本」という看板が出ていたのを見ついた。驚き3割期待5割喜び2割な気持ちで走る。さて、その本屋はといづと。

まず。小さい。普通の家の一角で趣味としてやつてんじゃなかろうかつて感じで狭い。いや、決して狭くはないんだろうが、中にびっしりと並ぶ本棚と、本棚に入りきらなかつたのか、いたるところに山積みになつていてる大量の本がそこを異常に狭く見せている。もとはきっとドールハウスのような洋風のかわいらしい家だつたんだろうが、ガラス戸の向こうの景色がそんな印象と混ざり合い化学反応を起こした結果、もはや不気味としか言いようがなくなつっている。ガラス戸の横に申し訳程度に設置された看板には、「観幸書店」。そんな不得体のしれない不気味な雰囲気を醸し出している謎の本屋に怖気づいていると、中から不思議な声がした。

「あなた、そんなところに立つていないで入つてきたらどうですか
？暑いでしょう、そー。」

その声は、まるで子供のように甲高く、しかしそれでいて心地よい、ずっと聞いていたくなる、不思議としか形容の仕様がない声だつた。そんな声の持ち主を見てみたいという好奇心を抑えきれず、ガラス

戸をゆっくりと手前に引いた。チリン、とガラス戸上部に付いた小さな鈴が音を立てる。恐る恐る、といった感じで足を踏み入れると、甘い香りが俺を襲つた。襲つた、というと誤解を招きそうだが、決して甘つたるい、とか不快な甘さとかではない。甘いのに爽やかで、さつきの声と同じような、不思議な香りが充満していたつてだけだ。さらに奥へと進むと、周りの山に比べてひときわ大きな本の山があつた。その山がもぞり、とうごめく。ビクッ、と固まつていると、さらにもぞもぞと動き、中から人がゆっくりと起き上がつた。

腰くらいまであるぼさぼさの黒髪。前髪も伸ばしつぱなしで顔が完全に隠れている。今は夏真っ盛りだというのに、白い長そでTシャツ。小さめのサイズを着ているのか縮んだのか知らないが、体のラインが丸わかりだ。まあそれなりに凹凸の激しい体だった。そして黒っぽいデニムに、赤い無地のエプロン。

…変な人だ。そう思つた時、その人がぼさぼさの髪を手櫛で整え始めた。長い髪を後ろでゆつたりと一つに結ぶ。それでも余つてしまふ前髪は、真ん中でふわりと左右に分け、一房だけ残して耳にかけた。そうしてようやくその人の顔が明らかになつた。

その顔は、とても中性的で、顔だけ見たら男か女か分からないほどだつたが、美形であることは確かだつた。

その人はゆるゆると立ち上がり、エプロンをパンパン、と何回か叩くと、思い出したかのようにこう言つた。

「よひじや、観幸書店へ。」

それが、俺と実幸さんの初対面だった。

仲澤鳴海の場合 第一弾（後書き）

どうも。続きを一つ載せるかは未定です。

こんな本屋があつたらいいなって気持ちを詰め込んだら

こんなのが出来上がりました。書いてすごく楽しいです。

こんのが好きって言ってくれる方がいたらうれしいです。

ちなみに観音はみゆきじゃなくてみささぎです。実幸も同様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7982z/>

観幸書店の実幸さん

2011年12月25日17時45分発行